

川柳雅証

(行發日五十回一月毎)號三第卷五十第 行發日五十月三年三十和昭 可認物便郵種三第日三月三年三十正大

輯編★郎路生麻



3

號三第 卷五十第
行發日五十月毎

典雅な日本座敷

北理京 白蘭

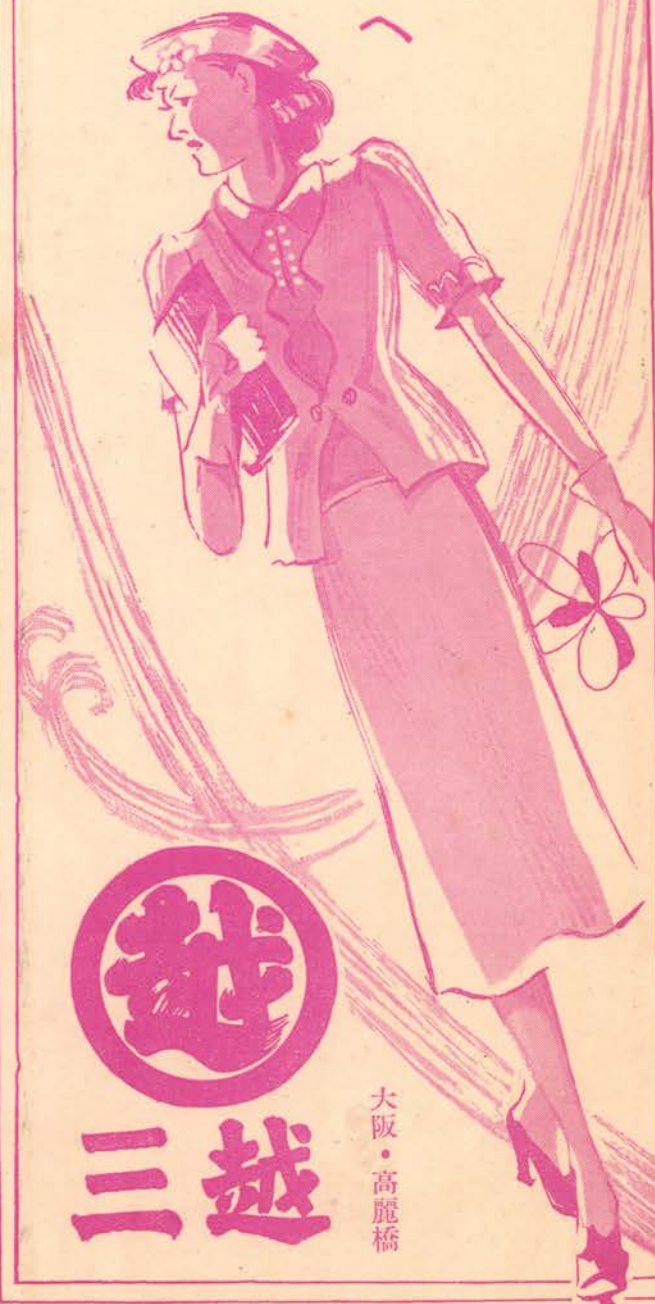
土佐堀船町

菊正宗

店商納嘉本 會社 株式

お買物は
みつこしへ

品が良いから
値が正しいから
上品な雰囲気
が好きだから……



越 三越

大阪・高麗橋



抄句洞朽不

郎路生麻

春の草
代議士などに踏まれるな
北支工作
女を募集するここか
北支の地圖の下に重役

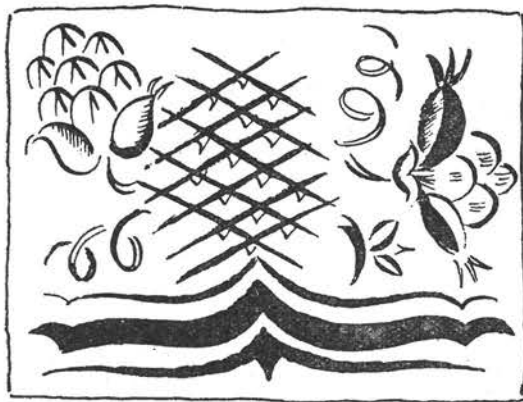
★OFFICE 餘談

或る日のこと、川柳家の楊井二南クンの姓について話が出た。
あれはやぎゐと訓むので、あの木篇に易といふ字は満洲あたりのやなぎで、日本のやなぎは柳の字だといふと、そうすると幽霊の出る方のやなぎが柳の字で、匪賊の出る方のやなぎが楊ですネ。
そうだと、君はなか／＼頭がいゝよと云つたら、エ……と笑ひながら歸へて行つた。
×
隣りの喫茶店へ這入る客の自轉車が、又してもオフィスの出入口をぶさぐさので、北クンが
「ココへ自轉車置ク事御遠慮下サイ」といふ立札を出したが薩ッ張りキキメが無
い。
「ココへ自轉車置ク事」まで読んで「御遠慮下サイ」は讀まないらしい。

×
オフィスの窓外、それも黄昏に大阪朝日の方を眺めてみると、まるで有楽町の気分だ。漫画家○クン、東京が戀しくなるとやつて来る。
×
調査部でオフィスの來訪者を分類して見た全く多種多彩だ。
蘆屋婦人、醫學博士、畫伯、新聞記者、酒屋、漫話家、カメラマン、圖案家、羅紗屋、靴屋、本屋、畫料屋、セルロイド屋、鐵道官吏、市電従業員、鐵工所従業員、レビユーガール、ルンペン、重役、俱樂部書記等々々。
×
大阪に住んでゐて大阪を知らない葎乃女史にドコへ行くにはどう行きますと聞く人があると、女史はおもむろにハンドバックを開らき、何處から手に入れたか市電従業員の虎の巻、「大阪市交通便覽」を取り出すことにしてゐる。オフィスの春は長閑である。

誌 雜 柳 川

號 三 第 卷 五 十 第



川柳雜誌 三月號目次

表紙(文樂人形)……柴谷宰二郎

雜感二三

句は箇の現はれ
立場・立場
出でよ綜合誌

麻生路郎……(三)

祖父鴈治郎追慕川柳

林 敏夫……(三)

OFFICE 餘談

(一)

武玉川三篇研究(十五)

梅本秋農屋
蛭子省二……(四)

略 語

須崎豆秋……(三)

綽 名

不死鳥……(三)

川柳評釋百句

麻生路郎……(一〇)

川柳眞如

福井尺琴……(一〇)

不朽洞句抄

麻生路郎……(一)

戰地より(句)……月原 青明……(二)

近作柳樽……麻生路郎選……(六)

川柳塔……諸 家……(三)

一路集……長崎柳秀選……(四)

ほち袋……妹尾變人選……(四)

各地柳壇……社關係の人々……(二〇)

後 記……(一〇)

川・協・の・頁

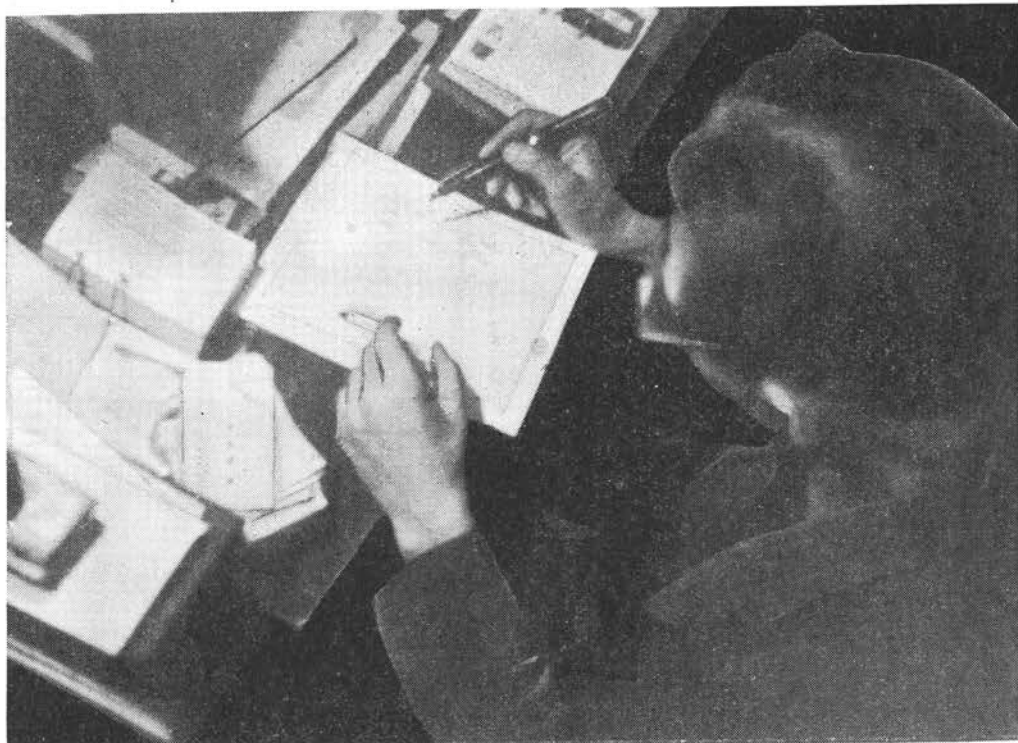
久良 古稀祝賀記念品贈呈に就て……(四)

柳人案描……(一四)

柳界展望……(六)

雜感 二二三

麻生路郎



女の着物が、その生活環境によつて違つてゐるやうに、川柳もその作家の生活環境によつて異なつてゐる。よく似た環境にある女でも、その風采即ち目鼻立ちの違ひや髪形ちの違ひや身長の高低、肉體の瘦肥の差で、柄も違へ色彩も異にして、それ／＼の箇性を表現することに つゝめてゐる。襟の色合ひ、履物の花緒の色合ひなどにまで、實に細心の注意が拂はれてゐる。

斯くして、その女の持てる限りの美を發揮し、持てる以上の美を發揮せうとしてゐる。

更に、それ等を思想的に見ると、古典趣味の愛好者は源氏模様を麻形模様を、鹿の子模様を撰み、洋趣味の憧憬者は印象派的な構圖に走つてゐる。或は明治趣味に生きやうとし、或は古典洋趣味の中庸をゆくなき斯くして、それ／＼

に、それ／＼の好みに光彩あらしめてゐる。これは物の發展してゆく順序である。この法則は頗る自然に、しかも時代の流れに沿ふて發展する。

これ等の嗜好、これ等の發展徑路を靜かに視てゐると、各作家の作品の傾向も、その發展の徑路が殆んど同じやうに思へて興趣が深い。

せんじ詰めれば、各作家は作家の箇の現はれでしかないし、又箇の現はれであるべきである。沒箇性の句は要するに着物で云へば借り着である。借り着が、その女の全貌の美を發揮することが稀なやうに、その作品には特異性を見ることが出来ない。女の殆んどすべてが、母や姉の譲り物で満足をしてゐるやうに、私達はそれ等の作品に少しも魅力を感じない。

立場・立場

川柳が明治末葉に復興されてから、殆んど四十年に近いが、その發展力の鈍いことは他の詩歌俳に比して遙に遜色がある。これは川柳そのものに、遜色があるのではなく、これに携はつて來た人々の罪だと言はねばならない。

明治文化の文學運動の上から見て何故川柳が、俳句の後塵を拜さなければならなかつたかと言へば、第一に子規の如き

徹底した俳人の出なかつたのにも因るが、韻文萬能時代に、川柳の如く平言俗語體の詩型が容れられなかつたのにも由る。

しかし、それよりも大きな原因は所謂川柳の大家が、何れも衣食の道を他に求め、専心川柳に打ち込むことが出來ず、本職が忙しくなれば心ならずも、川柳から遠ざかるか、或はお茶を濁すに過ぎない程度であつたからである。大家に於て然り、その他の人々に於ても、心のおもむく時川柳を愛好し、自己の仕事の多忙につれて疎遠或は絶縁なる状態であるから、常に一進一退して大所高處から見れば、實に遅々たる發展をなしたに過ぎなかつた。

茲に於て川柳を熱愛し、しかも川柳の社會化を主唱した自分としてはこの問題に深思すること數年、遂に意を決し、一昨年の夏斷然川柳によつて生きる道を講じた。あらゆる仕事、それ自體が何れも専門家を有し、それによつて生き、それによつて斯界の向上に發展を期しつゝあるのである。ひゞり川柳だけが、それが出來ない譯がない。これが私の結論だつた。そして、勇敢に斷行して今日に及んだ。私は夜を日について川柳のために没頭してゐる。やつてやれぬことは無い。

句は箇の現はれ

電車に乗る。

女の着物で同じ柄を着てゐるのに出合はない。よく似た色合ひ、よく似た柄はあらうが、その装ひ、その感じがひゞり／＼違つてゐる。

川柳の一句一句が、それ／＼の持ち味をもつて作家を色別けしてゐるのに、實によく似てゐる。

路郎でさへやれるんだ、自分もやろうといふ人が出てくれさへすれば自分の目的は足りる。そして各自が、適材適所に活躍したならば、数年ならずして更に更に柳界は前進するだらう。

今迄の川柳家は片手に子を抱いてミシンをかけてるやうに、萬事が思ふにまかせなかつた。しかも一人で、炊事から洗濯までしなければならぬ状態にあつたが、總てが専門家の手に委ねられるやうになれば勢ひ分業的にその持場々々がきまり、與へられた自分の持場はハッキリと護るやうになるだらう。

川柳家の誰もがその立場々々をまるやうになれば、くだらぬ揚足取は耻しくて云へないことになる。たゞへ揚足をこつても誰もが相手にしないから結局揚足取も手持無沙汰になつて消滅するだらう。

作家は作家の立場、選者は選者の立場、柳誌の編輯者は編輯者の立場、古句研究家は古句研究家の立場、評論家は評

論家の立場を認識して、自己の埒外へ無闇に容喙せぬやうになるだけでも柳界は隔段の進歩を見るだらう。しかし現在の柳界では立場を無視した言動が盛んに行はれ有爲の川柳家を沈黙させてゐる。指導的立場にあるものは特に留意して欲しい。

出てよ綜合誌

もう、そろ／＼綜合雑誌が出現してもいい状態にありながら、それらしい雲影すら見えない。

この時に當つて、大連から出てゐた「青泥」が滿洲綜合誌の目鼻がついたから「青泥」を解消する旨を發表した。この發表を見て私は實に痛快に思つた。それが滿洲だけの綜合誌であつてもいい。そうしたものが出て、總て中央にも綜合誌が出現する機運をつくることは、好ましいことである。柳界發展のために同傾向の柳誌は相次いで提携して力強く前進を續けて欲しいものだ。

(カット寫眞は執筆中の路郎主幹・沼波智美氏撮影)

祖父鴈治郎追慕川柳

林 敏 夫



鴈治郎を偲ぶ川柳會に、のぞんで以後、自分も拙ない句を二三書いてみました。

・孫へまで八方を云ふ鴈治郎

之は私が十九の秋に下加茂撮影所へ入社第一

一回主

演作品

「初陣」

が封切

られた

直後の

感想で

ある。

・春寒や魂ぬけし鴈治郎
死去されて五日目に、ふと走り書きによんだもので、河庄の花道をひつかけたところに祖父への追慕を、こめてあるつもり。

・戒名の似合はしからぬ成駒家

華やかな中村鴈治郎だつた。

「玉林院成鴈日扇信士」では、未だイタに付いてこない。

・今街をうづめるイ菱歸る鴈

之は祖父の辭世の句「今海をはなる舟や歸る鴈」をもじつたものである。たゞし本當は「今岸を……」が正しいので「今海を……」の方は、偶然、反古の書きつづしが發見されてそれが用ひられてゐるわけである。

寫眞は二月十二日から京都南座へ出演の林敏夫氏の
大石主税



松坂俱樂部

あらゆる趣味のお稽古場

手はごきから奥義まで
氣軽く、楽しく、御上達

會員募集

川柳講座

川柳雜誌主幹

麻生路郎先生
擔當

御申込は
七階松坂俱樂部
電話(代表)三〇〇番

松坂屋

大阪日本橋

お稽古
種目

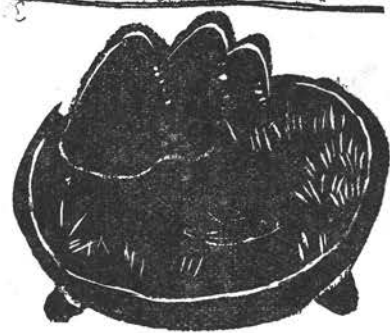
長唄 常磐 清元 鳴物

華道 尺八 舞踊 謡曲 能樂 小鼓

茶道 書道 日本畫 日書 茶

華料理 洋食 俳句

道楽 道學 氣棋 松坂レコード 吹込



武玉川三編研究 (十五)

梅 本 秋 の 屋
森 東 魚
蛭 子 省 二

(224) 寒聲の仲間はずれは物おもひ

秋の屋 少女が寒聲の仲間にも入らず、一人物思ひに沈んでゐるさういふので、雛妓か織子かであらう。

東 魚 哀れさがある。寒聲寒聲の凄じさの中の華かさにあつて、一層の哀れがある。

省 二 物思ひに對し、寒聲稽古なる材料は見つけもであつた。

(225) 太鼓へあたり曠な散錢

秋の屋 「散錢」は「賽錢」の當字歟撒錢さういふのは有るが、此の句は神樂堂の光景で、参詣人が擲る賽錢が、太鼓に當るさうであらう。

東 魚 前説の如くであらう。句法が切れ／＼な様で、さうも感心出来ない。

省 二 太鼓に當る程投げたのであるから、「曠な」に相違ない。合類節用集に「散錢、賽錢」さある。尤も眞俗佛事編をみるに、「散々ノ名内典ニ無之、俗ニ参々又ハ賽々ト書ケルハ本據アラン、散錢ノ文字ハ韓退之佛骨表ニ出タ

リ」さ。散華に因り散々の文字が生れたのであらう。又散

米から便宜上麦を用ふる事さなり、「江戸には下さまに米を用ふるさうかたつてなし、散々も今は散米さういふさうなけ

れはにや、賽々さのさういふ」さもある「散々」の文字の方を一寸見出さぬが、『神無月さんせん箱の肉かをち』拾遺さ假名になつて居る。『撒錢の時は羯鼓の音がくるさう』の古句は、撒錢さありはしなかつたらうか。これはマキ麦さ讀むか。尤もマキ麦には蔕麦の字もありはする。

(226) 灌佛の湯氣に隠れて一二町

秋の屋 甘茶を貰ひに行く老弱が、陸續さ往來するので灌佛を行ふ寺院の周圍一二丁は、その甘茶の湯氣に隠れるさ云ふのである。

東 魚 甘茶の日の賑ひが、「湯氣に隠れて一二町」に、巧みに描出されてゐる。

省 二 確に巧妙な取らへさうだ。珍らしい。

(227) たかれて來たる鶏の身振ひ

省 二 抱れて窮屈であつたから、放された時身振ひを

する。犬なごでもやる事だ。

秋の屋 温め鳥の放たれた時も、大方斯うするであらう
東 魚 寫生的で面白い句である。

(228) 大屋も知らず玉のこし來る

省 二 餘りにも不意に（然かも意外であらう）細君を迎へたのさういふので、大屋さんさへ知らないのだから、「玉の輿だネ」さの噂話にお可笑味を含むて居る。

秋の屋 玉の輿に乗る女は、身分が低いのであるから、世間に表立つて披露もせず、内密に呼迎へる故、大屋さへそれを知らずに居た。

東 魚 大屋もそれ迄の成行きを知らずにゐる處へ、俄に迎へ取りにきたので、なんだ／＼さうか、それは目出度いさ云ふ場合であらう。

(229) 御物怪に低い手まくら

省 二 物怪にさういふつかれ、手枕低く、打惱み居るさま。

秋の屋 手枕でも安眠するのではなく、俯してゐるのであらう。物怪に憑かれて、頭より衣を被つて臥してゐる、古圖を見た事がある。

東 魚 苦しみ打惱んでゐる態が、枕も押しのけて、手枕でゐる處に、よく描出されてゐる。

(230) 風に向て奴の反かえり

省 二 奴らしい元氣であり、態度である。

秋の屋 赤阪奴の颯爽たる姿が想像される。

東 魚 胸毛を風吹きさらしてゐる。凄しい男振りである。

(231) 梓にかゝる若衆さひしき

省二 口寄の梓弓の厄介になる若衆では、ごこやらしい事である筈だ。

秋の屋 市子の口寄さいふものに、賑かなのはあるまいが、若い女よりも若衆の方が、男だけに淋しからう。

東 魚 珍しい取材である。同じ死口を寄せても、若衆さはいかにも淋しい。

(232) うき時の丁子頭に唱へ事

省二 「丁子頭」の句は初篇『賣喰の丁子頭は無念なり』とあつた。丁子頭生すれば吉事ありと。『うまい事丁子頭へ言ひふくめ』(武・四)だが、夫れ丈けに憂き時には一層「丁子々々吉丁子」を唱へて、慰安も得たい事であらう。

秋の屋 此れは婦人の所作(ミ限定されないが)であらう。婦人は迷信が深いものだ。

東 魚 婦人ミ考へてよろしいと思ふ。「うき時の」なご、云ふ句體から、さう考へられる。

(233) 風巾を貰ひに言はらの屋根

省二 風がきれて、吉原の屋根へ引つ掛つたのを貰ひにく子供。無邪氣でよい。江戸では春の遊びあり、地方では五月のものになつてゐた。

秋の屋 市中の人家の屋根では、平凡であるけれども、吉原の屋根であるから、句にも成るのである。

東 魚 裏田圃で筑波ならひに揚げた風だらう。吉原の屋根へ貰ひに行くは面白い。

(234) 薬いしりのうへる桑の木

省二 二編には『桑の枝おもへば遠きはかりこ』があつた。桑は萬病に効ありといふ。中風、水腫、喘嗽、利尿、關節痛、其他が古書に擧げられてゐる。これでは薬いじりの庭に、植ゑて置かねばなるまい。

秋の屋 平素多病の人は、庭の植木までも注意して栽る東 魚 「薬いじり」ミ云ふ言葉は面白い。

(235) 結納にあたりのわるい若手代

省二 お家の慶事を、他の者は喜むで居るのに、若手代は嫉妬氣味で當る。(この若手代獨りきめをしてゐたのであらう。)

秋の屋 野心のある若手代、昔の演劇や淨瑠璃によく有るこゝだ。

東 魚 御目當の娘に贅養子が出来ては、勤める氣がしなくなる。「あたりのわるい」は軽くいひこなして可笑味がある。

(236) 寝入られぬ心につかふ有ツたけ

省二 心に掛かる事があつて眠に入らず、悶ふるため全神経を其一事に集中してしまふ。心をくだくのみである東 魚 色々な事に思ひを廻らす、寐入られぬまゝに、ミ云ふだけの事であらう。

秋の屋 有ツたけ心を遣ふミ云ふのであらうが、拙劣な句ミ評すべきである。

(237) 枕がや見て吹かぬ山ふし

省二 枕蚊帳の中には幼児が、すや／＼と眠りに入つて居る。心ある山伏は、ほら貝を吹いて、驚かせたりはせぬ。

秋の屋 東京市内に住居するミ、飴賣の太鼓、チンドン屋の囃子、隣家のラヂオ、孰れも幼児の安眠を妨ける。東 魚 作りのもの、句だが、うまい事を云ふものだと思ふ。

武玉川(前號)正誤
頁 段 行
四 下 九
文を盡き 文を書き

五本木

肺炎、感冒、等熱性病及ロイマチス、
神経痛等疼痛性疾患の濕布劑
として汎く應用せらる

包装
一〇〇瓦 二五〇瓦
五〇〇瓦 二瓦

御注意
近時類似粗悪品多數あり御
購入の際は必ず「エキ
ス」ミ御指名を希ふ

C-1

樽 柳 作 近

選 郎 路 生 麻



毛糸店近所の人がよつて編み

兵庫縣 酒井美知夫

言ひあてた銘酒に足を取られてる

同

寒念佛報謝があつた音になり

同

此間拾年かつらに見せた舞台面

同

女中より夫が大事な家並ぶ

同

陸軍金岡分院を見舞ふ

募集札飛びつくやうな口はなし

同

本懐ミ云へずに白衣無言なり

大阪 岩橋 双虎

バーマネットママミ呼ばせるつもりで居

同

鳥の行水を見つけた窓の聲

同

神様へお委せをして母強し

今治 長野文庫

丸刈で通す男の日本主義

同

子が征つてつくく見る支那の地圖

同

流轉して江戸を忘れぬ辯をもち

同

蝶々の戀の眞下に折ひらく

同

船の出る迄を廊の火が挑み

石川小松 勝山しとし

不機嫌を訪ね物賣哀れなり

同

アルバムに彼氏ミいふが貼つてなし

同

十八九性の活字に怖く觸れ

名古屋 鈴木可香

盗まれて叱られるのが腑に落ちず

同

老夫婦或日おやすくない話

同

人相見皆長命にして戻り

同

白粉を塗る掌の皺にふき氣づき

同

嫁き遅れ子のある事も承知なり

大阪 米谷松太樓

母はもう言ふだけ損ミ諦める

同

色男男甲斐なく育はれ

同

貳連銃鳴一匹も出ぬ寒さ

大阪 富本無煙

達筆へお先に廻す硯箱

同

看板の脚もさ寒い稻の株

同

お隣に留守を頼んだ書風の風呂

同

柳 界 展 望

催

全國川柳界のこと
各地川柳人の一舉
手一投足を此展望
欄ですぐわかる様
にしたい皆様の御
通信を歓迎する。

展 望 係

▼川柳雜誌本社三月句會は二十三日午後五時半から電氣科學館天象館を見學の後五階で開催され同館大文部の高城武夫氏の天體に關する趣味的な講演を拜聴して後、作句することとなつた。振つて參會されたい。

▼松坂俱樂部趣味道場の路郎川柳講座は三月六日と廿日に開講した。路郎主幹出席。

▼有恒俱樂部有恒川柳會では三月八日と二十二日に開催された。路郎主幹出席。

▼川雜岡町支會婦人部は四月から川柳處女會の名婦人ばかりでの句會を開かれる事になつた。

▼尼崎句會は三月廿一日夕刻から尼崎市衛生組合事務所で開催される由。

▼川雜岡町支會句會は三月五日北野衛生組合樓上に於て開催された。

▼柳友會東京は五周年記念句會を三月十三日夕刻より東京木挽町朝日俱樂部で開かれた。

▼室町會柳壇(京都)では十周年記念川柳大會を三月廿日木屋町御池上ル民政會館で開催されることゝなつた。

創刊と休刊

▼卷雲(東京)その創刊號が東京市杉並區馬橋四ノ四九〇から發刊された。編輯兼發行人は小西貞子君。井上信子女史の誌上を借りてが掲げられてゐる。



街路樹の新芽舗道ゆく目にこまり	豊中 小野 一步
教養を捨て、素直に聞いてくれ	同
男みな涙もろさを壁に向け	同
生き抜いてゆくに不義理の多いこ	同
運轉手切符をこるは義理のやう	大阪 古寺謙南坊
死水も取つて呉れない子が残	同
母親の帯が間に合ふ姉嬢	同
背中へも手の及ぶだけぬつて居	同
缺勤の電話寝巻のままで掛け	同
男湯で赤子の首をもてあまし	豊中 金田 並木
ねんねこで来てエレベータへ場所をこ	同
青春に枕カバーは直ぐよこれ	同
ちん抱いた姿姿さ見破られ	同
バイブルへ相済まぬ妓さほろ酔ふて	兵庫縣 田邊 由布
寢床から飲みなほす氣の今朝の雪	同
吾が命簡易保険の五百圓	同
八階の窓が冷めたい冬の月	同
北支く若さの君の行く所	朝鮮 廣津慶一
万歳を兩手一ぱい差上げる	同
口笛になつてのさかな土手の上	同
まだ詰まる餘地あるやうに車掌呼び	大阪 野本 香水
錢湯へ首巻が要る父の齡	同
次男坊が親の借金埋めてゆく	同
子澤山ラヂオの聲さ入り亂れ	東京 風間 花盈
叱られた人夫へまづい晝の飯	同
しつけ糸まだく仲びる子を笑ひ	同
石ころを押し除け蓬萌え出づる	下關 櫻川 不水
海豚よ睨せよ鰭迄綺麗戴いた	同
閑人苦有りアイフわかも養命酒	同
いつそもう蓼喰ふ虫さなりましよか	大阪 竹内機見女
毒草のごさ強くなれ強くなれ	同
人ざらひ庭ははこべの花かざり	同
監督に監督が付き役所の仕事	大阪 關本 雅幽
御近所へも聞かし催促歸るなり	同
人生を子に想はせる灸の痕	同
勝鬨は祖國へ届けの構えなり	長野縣 高峰 柳兒
リツクサツクくれくくく母送り	同
襲名も東の間整理迫るなり	同
靴をぬぐ父の背中に告げに行き	大阪 岡田 玻瑠
時折は歸る父なり親しめず	同
この涙ささられまいの子守唄	同
商才はするさし北支から便り	尼崎 酒井 斗風
試運轉車掌はキツトの靴をはき	同
正月の赤字三月までたたり	同

消 息

- ▼仁川川柳社を脱退した池田可宵君(川協名譽會員)によつて新たに高麗川柳社が樹立され、その創立句會が盛大に開催されたが四月一日には柳誌を刊行される由。發展を祈る。
- ▼川柳研究(東京)では百號記念事業の一つとして「昭和川柳の自選句集」を刊行される由。
- ▼満洲に綜合雜誌が生れる機運が熟したので大連から出てゐた高橋月南君主宰の「青泥」は近く解消されるそう。同君の川柳愛に賛し遲滞なく綜合誌の出現せんことを希望する。
- ▼柳誌「京ばし」と「柿」は三月限りで暫時休刊の由。
- ▼後藤青兒君(不朽洞會員)は一月三十一日夜腸チアスと決定、桃山病院へ入院されたが、幸經過良好二月二十四日に退院され、自宅で静養中である。
- ▼榎田竹林君(靜岡)は盲腸炎で手術入院中であつたが再手術高熱の受難を漸く通過され三月二日退院された。
- ▼蛭子省二君(朝鮮)の御令聞萬壽様は流感にて注射手當中、同君もその氣味ありとて外出を差し止められてゐる。一日も早く御全快を祈る。
- ▼月原宵明君(戦地)は去る十二月十五日南京入城以來國民政府裏手に駐在され、目下電信隊で大活動をされてゐる。
- ▼大島壽明君(満洲)は三月上旬公務で新京へ出張され、歸途湯崗子温泉からお便りがあつた。
- ▲西尾栗君(大阪府)は二月二十二日商用で出張の途次、皆生温泉からお便りがあつた。
- ▼西田紳樂君(不朽洞會員)から三月八日月ヶ瀬で静かな一夜を過したとの繪葉書が來た。
- ▼西いわを君(不朽洞會員)は三月六日笠置山へ登られ早春の山の香に親しまれた。
- ▼橋本綠雨君(不朽洞會員)は三月十三日椿温



腕時計派手なその手へ晝がくる	大阪 如田よし江	寝てをればいゝに母へつよく言ひ	布施 福井 尺琴
知れきつた愛よ頂上は見えてゐる	同	牡丹雪別れの傘のままに降り	同
つぎあてた心にさけもさゝるなり	同	上役の駄目を押す目の面白し	同
ノーハット櫻の花が咲いてゐる	松江 勝谷山川 兄	上京へ悪友ながら頼つて見	愛媛大洲 酒井 肱水
お妾の家へ夜警の通知来る	同	乾杯へ母も無理やり立たされる	同
祝 紫薇花君結婚	同	みんな事願ふか母の長いこと	同
晝辨當妻の姿のうかぶもの	同	行く先は辻できめやう春の泥	名古屋 平田 素天
皮肉かさひがむ心を勞はられ	大阪 山本 葉光	商人の話細かい事にふれ	同
肉身を頼る心の淋しい日	同	役不足客が云うてる寶塚	大阪 澤田 粒子
薄情を恨み切れずに病み續け	同	集金に小言云はれた留守の猫	同
講演に飛行機で来た事も聞き	尼崎 山田南 濃路	二十才代ビルをバツクにして寫し	松江 松枝 房兒
前身を洗ひ合うてる銀狐	同	アベックへ目高はすら／＼行く	同
あたつて見るだけの女二年住み	同	大阪の姿ラヂオの迷ひ人	大阪 落合陽 左右
年越しは何處で越したか朝歸り	大阪 泉 流 葉	寒さ云ふ音があわてた利久下駄	同
親類さ云ふだけの年賀狀	同	座布団を二つに折つてゐるおじぎ	大阪柏原 宮岡 公子
梅見酒酔廻らさぬ風が吹き	同	金魚も泳いで春の日向ほこ	同
息子もうトンビが似合うやうになり	大阪府 川村 觀月	何さまか知らぬお山のありがたさ	大阪 田中 風葉
凡人の義務に束縛されて生き	同	人事にして意見する兄さなり	同
内閣を論じて香具師は人を寄せ	同	靴音揃へ日本晴れの門を出る	廣島 福岡葉 留路
孫孫でうっかり孫にけつまづき	奈良 田嶋 翠峯	ダットサン先頭で待つ赤信號	同
家政婦は弱い亭主連れ添うて	同	リボンあか／＼理想のハスは何處にゐる	大阪 大鶴 喜由
鼠もう齧りつかれて朝さなり	同	決死隊そなたも妻子あつた筈	同

泉便り寄せられた。

▼菊川泰平樂君(鳳凰城)は安奉線驛調査のため出張され五龍背温泉から「歐洲のうさ捨てに來る五龍背」の句を寄せられた。

▼村松夢裡君(不朽洞會員)は相變らず社用で多忙、三月初旬出張先の濱松からお便りがあつた。

▼大西八歩君(不朽洞會員)は商用で出張勝ち、句會場で逢ふ事は殆ど稀れであるが、健在で何より結構。

慶 弔

▼長崎柳秀博士(兵庫)の御令息には二月十四日芽出度華燭の典を擧げられた。お慶び申上げる。

▼白石紫薇花君(松江)は二月三日目出度く華燭の典を擧げられた。

▼野本吞水君(大阪)は二月二十八日華燭の典をあげられ、丸尾潮花君が岡町支部代表として参席された。新婦はなつゝ様。

▼蛭子省二君(朝鮮)は去月、七十六才になられる御尊父を喪はれた。同君の御愁傷御持病にお障りなき事を祈る。

▼押谷たけを君(大阪)の嚴父が二月二十三日に永眠された。謹んで悼む。

▼松本文太君(金澤)の尊父が三月十日午前四時に他界せられた。戦傷のため金澤陸軍病院にある同君の心痛慰むる辭が無い。

轉 居

▼安川久留美君は金澤市長町七番丁二の二へ

▼飯尾寄典史君は尼崎市大物町三丁目四一五潮領之助方へ。

▼小西落丁君は布施市永和三丁目三四へ。

社 告

▼川雜天王寺支部は霞町句會と合體して天王寺支部となり、新幹事は妹尾變人君が擔當し須崎豆秋君は後見として支部の爲に盡くされる事となつた。

▼川、雜廣鐵支部幹事濱田久米雄君は福岡葉



街頭の春だ机に吐息する 松本 小宮山雅登
スズラン燈冬の悲哀の降りそぐ 同
健やかな子の朝々を犬に駆け 大阪 永並さいち
不具の子が眠たい母に仕舞風呂 同
虚榮心日々に墮落へおちて行く 廣島縣 瀬戸斗秀
嫁がせてはじめて母の疲れが出 同
夜ふかしへ風呂までぬるくなつて居る 大阪 毛利稔幸
満員車淀川渡る音に知り 同
首吊りの服も掛けてる赤禪 尼崎 北川春集
四十の春運勢の本を読み 同
年寄のもう覺めてゐる咳がする 神戸 山本麥一
日曜の水屋をあける手は男 同
パーマメントかけて四十の坂を越え 大阪 竹内美津枝
三度目いふ嫁入が露次を出る 同
新聞を読めば日曜用がなし 長久保 林 幹
實演を皆見て香具師の客が散り 同
牡丹雪エブロン受けて待つてゐる 大阪 堀毛龜次郎
純情の母にすくく子は伸る 同
ばち袋だいて八ッ口紅がもれ 静岡 乾 幸子
女答へずうなじくねらせる 同
賽銭を投げて祈願のこぼれた氣 愛媛大洲 米澤曉明
終電車までこ飲んでる久しぶり 同

お前の心が母ははがゆがり 九尾 馬場浪二
ストープへ本當に寒い顔が来る 同
知らぬ間に日影の變る汽車の旅 大阪 山川富士
ホームの長さに荷物重たがり 同
もう信用をして貰ひたい辨當箱 下關 多田市植樓
お隣も若水を汲む星明り 同
父の酒自慢話で寝てしまひ 大阪 富岡巨人
あらためて額を見上げる一周忌 豊中 長岡柳風
内金は其の都度くんに詫びてゐる 今治 田窪良矩
根が有るかなぎ聞いてゐる夜店 大阪 小川 清
日向ほこ猫だいて来る蒲柳の子 長野縣 佐二木千隈
不始末な噂の中に一周忌 尼崎 飯尾寄典史
金策へ過去の行狀邪魔になり 大阪 多田一波
一銭はそこらに轉ぶ子の寝顔 廣島 奥富天作
陽炎へ去年のままでの分譲地 松江 西本小未
酔ふて來たのか父は唄ひ出し 大阪 林 加代子
三人の時計一分づつ違ひ 松江 五島君郎
それらしい靴音一寸針を置き 大阪 宮口芳醇
白樺老ひも若きも國婦會 大阪府 大島石舛
一時間も待たせ煙草溝に捨て 大阪 若井 清
美しい傘干せば春の日がける 松江 白石紫微花
カメラマン何處を撮ろか迷つてゐる 大阪 綿 ユリ子
父である足を玩具の店に止め 愛媛大洲 高月溪月

留路君と交送された。同時に支部事務所は廣島市霞町三〇五ノ八へ移轉した。

▼本誌五月號を以て十五周年記念特輯號刊行に決定したので、各位の支援を切望する。

その方法としては

一、興味ある原稿。

二、祝賀廣告等々に就き御高配を乞ふ。

目下のためそのための大會は開催しないことにして居る。それよりも月々の句會をより有意義なものとしたいと思つてゐるので弊社の微意のあるところを諒とされたい尤も句會以外に何等かの計劃はする積りだ。

新モルホセ 男性 性

本劑は最も旺盛なる活動力と絶倫なる精力とを有する水棲哺乳動物(鯨)の雄性生殖腺より抽出せし總有効成分を原料としたものなり。

適應症
勃起力減退、早洩、性慾缺乏、快感減退、男子更年期諸症、視力減退、聴力減退、精力減退、男子一般老衰現象の豫防恢復用法、用量
本劑は毎日三錠一六錠一日三回食前に服用す。

包裝
各錠一〇錠入 各〇六錠入
大日本製藥株式會社
本店 大阪道修町
支店 東京本町

新発売品

川柳評釋百句

(Ⅲ)

麻生路郎

悩みに答ふ答へてくれて亦悩み

沐天

答へる人は成瀬無極だ。菊池寛だ。與謝野晶子だ。山田わかだ。迷へる羊は更に迷ふ。

靴磨 磨きたい靴前に行く

渠

靴磨の世界には靴が右し左するばかりだ。泥靴々々、あれ位汚れてゐたら、磨き暗れがするだらうに、アッ行つちまつた。ひつたくつても磨きたい靴が……アッ又行つちまつた。

施しをして お妾は手を洗ひ

夕鐘

一ト握りの米がお妾のこゝろをなごやかにした。しかし手を洗ふ別の心をさうすることも出来なかつた。

ドレス着てやつぱり容子して走り

かほる

「なぜ容子して走るんだらう」

「そりやア、女ですもの」

「そうかしら、あれで矢つ張り女かなア」

おちぶれて部屋に餘つた蚊帳を吊り

孝輔

眼に觸れる限りは過去の華やかさである。現在の物足らなさである。豈蚊帳のみならんやである。

洗濯を途中で呼んだい、便り

幹

「オイ、來たぜノ」。明六日午前中に來いましてある。これ俺も浮び上れるぞ」

福壽草松にしたがひ候かしこ

葭乃

柔よく剛を制すか。從來の日本婦人は「松にしたがひ候かしこ」だつたが——今はさうだか。

かしわ屋の女房になつたおそろしさ

毒仙

次ぎくに殺されてゆく難を見て、これが渡世だ——は思へない女房である。

煽風機今度お前の方へ向く

久留美

右したり、左したり、サラリーマンたる彼氏も決して樂ではない。

エキストラパスを一枚宛貰ひ

豆秋

これでも役者だといふ誇りを持つてゐるから、あれでも役者かと思はれてゐることは思はない。

曼珠沙華電車を汽車がおつかける

曉童

白い雲が山の端にかかつてゐる。百姓は手を休めやうともしない。



川柳眞如

福井尺琴

もつと川柳を

そのかみ、難文を書いたり、シナリオを書いたりして飯の種にしてゐた時分のこと。とにかく矢鱈に書きまくつた。人が、よくそれだけ材料があるなアと云つて、事實目を睨つて驚嘆したものだ、私はそんなに苦勞したとは思はないし、疲勞を感じると云ふこともなかつた。

ところが今は××キネマの宣傳部長をしてゐるKと云ふ先輩が、忠告的に云ふがと前提して「君の書くものは實際讀ませる。面白い。だがどうも思ひつきと云つた感じが深い」

なるほど、云はれてみれば正鵠を射た言だ。それからの私はものを書くに云ふことに怖毛が出て、しまひには全然書けなくなつてしまつた。よし書いても畸型兒的なものになつて一顧も與へられなくなつた。

これではいけない！金満家の隠居が不老長生の薬を、金に糸目をつけず探し求めるやうに更生の道、更生の途と鉦を叩いて廻つた。

その私に猿轡をのばしてくれなもの、それは川柳であつた。川柳を通して見た社會眼、川柳と云ふ活人劍の下に浮ぶ瀨を見付けた私は、紀文が品川を望んだ時以上の法悦を感じてゐる。川柳は寔にわれら生活の横の

歴史を、如實に表現して刺すところがない。

川柳を解すると云ふことは、たしかにこれからの社交術の上に、一つの地位を要求するであらう。頭を敲られて、お手が痛みませんかと云ふ言葉は、その底に云ひしれぬ川柳味が流れてゐる。

文化人ほど感情が濃やかだと云ふ。日本人も既に中外に劣るところのない文化人なら、もつと／＼川柳などを熾んにすべきではないかと思ふ。

暗黒街の顔役

この間、ニュース館をちよつと覗いてみた。一時は押す押すな盛況であつたニュース館も、事變の一段落と、ニュース館そのもの、同志打ちで、客足はだいが閑散であつた。それでその補強策として、ちよつとしたシノブシのある映畫をはさむやうになつた。慌しい皇軍の働き、それとは凡そ對蹠的なロマンスを見せられるのも、一層皇軍の辛勞をそよ身に感じてよき効用をなすかも知れない。

「暗黒街の彈痕」と云ふのを、ゆくりなくも観た。シルヴィア・シドニイと云ふ非常に理智的な顔をした女優と、ヘンリー・フオンダと云ふ近代的な二枚目の演じる一種のギャング映畫であつた。

次男 逝く

一と七日二た七日とて秋の花

靈 子

次ぎ／＼花をさりかへて見ても、矢張り淋びしい秋の花だ。こゝろのいたみはつるばかりだ。

セルを着て區劃整理の道を行く

綠 雨

何んか土地株式會社分譲地の杭が青空に聳えてゐる。バスの埃りはここまでさかぬ。

逢ふて來たのに母寒からうく

多 喜 女

「母親は勿體ないがだましようい」さういふ古句があるが、母親の方からだまされてかかる盲愛ぶりだ。女よ、多幸なれ。

鼻唄で出來た棺桶とは知らず

巷 二

凡そ商品名をつくもので、棺桶位商品らしくないものがあるまい。大ききで一號、二號と呼んでゐるか、さうだか。

どこへ行く人かテープを持ちもせず

正 舟

果てしなき人生の旅に、何んのテープぞと悟つてゐる譯でもあるまいに。

本當の散歩へ子供ついて來ず

啞 三 味

三輪車になるか、繪本になるか。子どもは犬のやうにかざわけることが巧い。本當の散歩ださ知つたら、もうそこらには居ない。

ちと古い頭を持つた知事夫人

盜 泉

浮草稼業のベターハーフだ。行く先き／＼で婦人會の會長さんに祭り上げられる。うっかりしたことは云へない。すべては型の如く型の如くだ。チト頭の古いのに不思議はない。

新藥を教へに行けば知つて居り

の ぼ る

僕は常病人だ。下手な藥劑師より詳しいのも不思議はないだらう。

集金を斷りうがひしてゐたり

變 人

集金人の後ろ姿のさびしさは自分の心のさびしさだ。病苦を思ひ生活苦を思ふ。

朝顔の鉢へしやがめば兒もしやがみ

不 二 也

今日は會社はお休みだ。圓卓の上にはトーストにミルクバットに朝の新聞紙。

味の無い蒟蒻もよし花見酒

由 布

何はなくとも、酒さへあればの口か。階級の低いこどもおのづから描出されてゐて面白い。

一本の外はごうでも良いテープ

橙 舍

棧橋は見送りの人、人、人で埋まつてゐる。海外航路のXY丸はテープの波だ。

いつの世にも容れられぬ前科者、いちど受けた烙印に寄る白い眼に、つひには正しい白砂路を進まうとした足をそらせて、折角新しく穿きかへた白きズボンに泥濘に汚してしまふ哀れな青年と、盲目的な戀愛至上をもつて命とかへる純情娘とのロマンス。

その一齣一齣の中に、私は川柳を解し得るものゝみが知る深い味はひを知つた。青年は刑務所を出ると官選辯護人の暖い情の世話とある運送店に就職し女との愛の巢に今まで荒き世の風に痛めつけられた翼を憩めやうと、ひそかな樂しみに心躍らせたのも束の間、わずかな失策と前科者といふ先入觀念が災し

もう一度罪を重ねればアメリカの刑法では終身刑だ。その時銀行トラックを毒瓦斯を以て襲撃し、殺傷夥しき事件がもちあがつた。しかも、現場に遺棄されてあつたソフトは彼のものの。彼はつひに刑務所の門を三度くどつた。女は男の潔白を信じ潔白なれば必ず放免されるものと信じた。官選辯護人は職掌以上の辯護をした。罪は十目の見るところ死刑といふ推測だつた。しかし、女と官選辯護人はさう信じなかつた。女は家庭では、いつそ早き死刑を念じ、それによつて娘が悪魔から離れ得るとして、判決のさうならんことを祈つた。官選辯護人は云つた。誰だつ

戦地より

月 原 宵 明

朝香宮殿下を迎へ入城式

畏くも馬上豊かに中山門日本の水が一杯だけの慾南京が陥ちて墓標があそここ船脚の遅きを見れば病院船退却を知らぬタンクの幕進だお前もか君もそうか慰問品排日の字句整然と書きも書き

て明日と云はず誠になつた。女にそれを知らせることは、自分が過去に犯したどんな慘酷なことよりも、一層慘酷であることと彼は自覺した。拳銃を執れば金などすぐ耳を揃へることが出来る。だが、それは絶對出来ない。しかも、前科二犯の彼には

私はその言葉を、しみ／＼と聞いた。

土くれの影の高さへ重嘆き

川柳塔



路郎選

大阪市 橋本 緑 雨

入浴の沖に一つの灯を見つけ
貝がらを蹴つて海岸ちみ寒し
梅林の下をくゞつて子は遊び
鶯のうごきを宿で眺めて居
白樺の玩具をみるさ山戀し

大阪 高橋 かほる

朗らかな姿帽子の函を提け
自轉車に櫻の造花積んで行き
喫茶店隣は古いビルディング
何んと言ふ酒かさ梅へ背を向け

横濱 福田 雨 樓

かすれ聲別れた養母にある氣性
店の間で一つ蒲團の間屋筋
腹が出て男盛りを意識する

故郷の父

またしても孫が十七人さ父

大阪 奥村 丹 路

箱根權現にて
謹んで踏みしめて行く霜柱

熱海ホテル (四句)

宿の湯の廊下のながさ羞らふよ
何事も思ふこころなし海の色
や、遠き潮騒をき、暮れんさす
春ちかき夜を素足の座りやう

歸阪途上

車中閑あり我にかへれば愚に近き

近況 (三句)

主人然さ座れば木の香疊の香
おちつかうさして眞白なる原稿紙
妻のおもひ夫の思ひ淋しくも言ふ

兵庫縣 水谷 鮎 美

占ふてもらふ日向に梅にほふ
街をゆくマダムに意見するつもり
燈明へよき父であり夫たり

キリストの像へ夜明けのひさり言

大阪府 朝田 新 水

なつかしい記憶二人をつなぐのみ
慰靈祭父亡き兒さ思はれず
慰問狀留守の無事から先に書き

大阪 姫田 夕 鐘

北風の衝立てになるお父さん
藥瓶錢ミ引替へ無表情
酒だビールだ電車賃が無くなつた

けしからん事になつて娘のお腹
惚れてない證據さつさ酒を注ぎ
淀・鳴尾・たんミスラれに來てなるなり

大阪府 妹尾 變 人

冗談はさう／＼牛の聲になり
シャンだなと思つてたら連がるた
出勤はおしめの下をくゞりぬけ

白酒へ時局の父も戻つてゐる

大阪 須崎 豆 秋

今年こそはさ立ち上つたがもう櫻
千金の夢堂島の鐘が鳴る

川柳・案内

大體活字十四字三行
金五十錢 (一行増す)
改訂、移轉、句案内
柳歌、廣告、その他

川柳を作る人愛好する人の必讀誌
毎月一日發行 一部廿錢 送料一錢

川柳俱樂部

東京牛込區湯場町八川柳俱樂部社

代表誌 川柳草薙

一部一〇錢 一年一圓 (郵税共)
名古屋市南區八熊町寺田
發行所 草薙川柳社

川柳さやり

菊判每號七十數頁

毎月一日發行 一部廿五錢
東京豊島區高田本町二ノ一四
六八 川柳さやり吟社

京 一部十錢 一年一圓

京都市西木屋町四條下ル
發行所 京都川柳社

月刊 みちのく

一部十五錢 一年一圓五十錢
青森縣黒石町 川柳みちのく社

昭和川柳

一部廿錢 一年二圓四十錢
大阪市東區伏見町五ノ六一
昭和川柳社

「大正川柳」第五一號及び第五
八號相當の代價にて譲受けたし
川柳雜誌社内 BB 生

懸賞川柳

課題「相手」四月十日
「薔薇」五月十日
用紙は官製ハガキ (化粧柳壇と
明記の事) 選者藤生路郎氏
秀逸數句に薄謝を呈す
宛先 三ノ三六 藤生路郎氏方
化粧新聞社柳壇へ

川・柳・句・箋

「川柳雜誌」への
投句は楕形の美し
い投句用箋をお用
ひ下さい

句の書き心地もよ
いし選者が選句さ
れるのにも、便利
なので特におすす
めいたします

送費は本社で負擔
いたします

八十枚綴

一冊 金十五錢

同 二冊 金廿五錢

御申込は
川柳雜誌社へ
切手代用可

路郎先生染筆

路郎先生筆、掛軸、横額小
物、短冊を川柳家に限り左
の通り頒布致します
軸箱入三圓以上、額額以上
小物 五圓・短冊 參圓
御申込は前金で發行所へ

「後の葉柳」を頒つ楕形四頁三
部十錢、切手代用二錢五枚

川柳雜誌社宛

合本特賣

川柳雜誌の合本自第二卷至
第十二卷 各金壹圓五十錢
第十三卷及十四卷 金參圓
送料 大阪市内 一冊六錢
市外 一冊二七錢
御申込は前金で川柳雜誌社へ

人間が丘に座つて居る平和
ぬいだ着物に重さを感じたる新芽
大阪 後藤 青 兒
瘦せ切つて覗いた窓の町の煙
浦島の氣で町を見た病み上り
退院を子等に取巻かれた日和
大阪 西 い わ を
退職の後は氣易う會つてくれ
掛茶屋の寒暖計を覗いて見
松本 石 曾 根 民 郎
古き戀ゆすつて雪の路ほそく
冬雨聴く農夫の肩をいたわる灯
戀のはて老ひし別居の竹箒
大阪 中 西 を さ む
物干のエロミグロミに風があり
輕き笑ひをマスクの中に感じたり
陽の光りぬるく舗道へ二月くる
大阪 柏原 宮 岡 白 峯
白衣の勇士を慰問して
御見舞の口がもつれて居るベツト
俸給ミ云ふを忘れてゐる寒さ
交通の巡査は笛を派手に持ち
大阪 加藤 ラ イ ト
母親を眞似て市松へ獨り言
新婚を訪ねて行けば錠が下り
風強く訪る人を風にする
廣島 鳥 生 古 弗
口笛は寒さを通り越してゐる
斷髪の見れば見返す勇氣あり
出勤の時間に用を頼まれる
大阪府 大 坂 坂 形 水
修身を抜け出た婿だ親が惚れる
良い息子さんの月給聞かされる
日曜日犬ミ並んだ日向ほこ
大阪 正 木 水 客
利己主義ミ思ふ日の我が影ミ居る

盛装の體すこうし斜めにし
髪のパラうすくよごれて働く身
大阪府 黒 川 紫 香
古井戸をのぞけばすこし砂が落ち
波かすかゆれるミころで蟹が這ひ
達者達者ミそれ丈けの軍事便
大阪 丸 尾 潮 花
強風へ春の潮の騒ぐ音
叱られたのであらう子供は灯にそむき
純情ミ言ふが淋しい歳になり
朝鮮仁川府 池 田 可 宵
目薬のフタ探す手もなれてゐる
封筒の中の金なら高が知れ
戦死の報に抱きしめる男の子
朝鮮の春
温突へ飴の鉢が遠ざかり
兵庫御影 長 崎 柳 秀
研師今支那膺懲の肩をぬぎ
覺悟ミは武人の妻の云ふ言葉
伊達でないステッキの要る父の腰
脊ミ脊たいたいて松魚節は賣れ
非常時を知らぬではない披露宴
松山 酒 井 大 樓
燃料國策にそひあるこうぜあるこうぜ
酒増税へ言及をせぬ夫
粕汁に酔ひし妻子の阿呆くさし
早く寝ろねろミ商店法が言ふ
軍事郵便朗らかな母ミなる
東京 阿 部 佐 保 蘭
この頃のラヂオ總動員に盡き
見て居れば我が兒火箸を遂に甜め
今 治 渡 邊 曉 童
イモン文鉛筆の芯ミさんがらし
生れ番地で過す倅
旅に居て今立つ宿の名を見上げ

略 語

須崎 豆秋



自動車のお尻についてゐる
「ネーム、プレート」に、このあ
いだ「大工」といふのが走つて
ゐたので、連れの友人が「大工
組合」の自動車だらうと云つて
ゐましたが、あれは大工科大
學のだそうです。大阪大學病院
のは確か「大病」だつたと思ひ
ます。

それにしても「川維」新年號
路郎先生と霞乃奥さんが自動車
から降りた所を撮つたあの寫眞
のは「大」だが、あれはいつ
たい何所の自動車だらうか。

市電の停留所でも「天六」と
か「上六」とかは大阪の人なら
誰にでも判るが、先日お大師さ
んの日にお婆さんが車掌さんへ
「テンサイ」「テンサイ」と云つ
てゐるので何所かいなと思つて
ゐたら「天王寺西門前」のこと
でした。

綽 名

不死鳥

綽名も一つの人気で、ホント
の名を呼ぶより綽名で呼ぶ方が
親しみの深いものだ。
學校の先生などは綽名の就て
ゐないのが寧ろ珍らしい位だ。
どのクラスにも一人や二人の茶
目があつて直ぐに綽名をつける。
それがなか／＼適切なので、ま
たたくまに、呼びならはされて
しまふ。
綽名は川柳に於ける穿ちと一

ハービヒサア
社會式株酒麦本日大

★ 柳人素描

(二二) 高橋かほる君

あんたの好きなものはと聞けば言下に、「エライヤツチャ／＼、芝居、芝居の物真似、落語の二階ぞめき、粹な座敷で三昧の音を聞きな



なんし朗らかな事が好きだ
んネ」と答へ
るかほる君は
浅酌では、お
さまらぬなか

くゝの酒豪だが、洋食はてんで嫌ひだといふ。それに鐵砲の音も鐵砲の形も嫌ひやさかいに五段目は未だに嫌ひさやといふ變り方だ。君の逸話は書けば際限がないからわざと書かない。川柳はいづごろから始めたか、ハツキリしないそうだが、もう十六七年にはならうローカルカラーの句に巧みで路郎門として既に一家をなしてゐる。

君の句で

大阪は轢かれかけても好い所
はあまりにも有名である。

花電車牛が曳いたら動きそう
浪花節乗り込むところが聞こへて來

などがある。

名は作造だが高橋かはるで押し通してゐる。別號に忠正(ただまさ)や、ややぼんがある。忠正は美人畫の先生からいただいた名だそう。君は明治三十年に絃歌の巷、島の内に生れて島の内を離れたことのない人だけに今時珍らしいホントの大阪辯だ。

川柳雜誌社不朽洞會員。川柳人協會理事。

(二三) 宮岡 白峯君

今が働き盛りの宮岡白峯君は大阪市電交通労働組合中央委員といふ長つたらしい肩書で飛び廻つてゐるが、川雑鶴町支部の前幹事と

★
一
路
集

募集句

久良伎翁古稀祝賀
まことに慶賀に堪へない。
翁は資性穎敏直情の人、私
財を投じて多年、柳壇のため
に貢獻されたことは何人もも
くこれを知る。
茲に我が協會は古稀祝賀記
念品贈呈資金を普く天下柳人
に募る事とした。左記小規に
記念品贈呈に就いて

日本柳壇の耆宿坂井久良伎翁（川柳人協會名譽會員）が、
 齢ひ古稀に達しられたことは、
 まことに慶賀に堪へない。

翁は資性穎敏直情の人、私財を投じて多年、柳壇のために貢献されたことは何人もよくこれを知る。

茲に我が協會は古稀祝賀記念品贈呈資金を普く天下柳人に募る事とした。左記小規に

據り御賛同を乞ふ。

一、記念品贈呈資金は一口三拾銭のこと（一口分を頗ぶる小額とした

る理由は川柳人及び川柳に關心を持つ人々の一人でも多く賛同せられんことを希望するに外ならない



久 良 伎 翁



翁 伎 良 久

幾いでも申込んで下さい。

一、記念品贈呈資金受付は三月一日から、八月三十一日までとする。

(比較的長期とした理由は出来得る限り広く知らしめたいからである。)

一、記念品の選定及び贈呈の方法に就いては本協會に一任のこと。

一、届先は大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地 川柳人協會。(記念資金拂込みはなるべく振替大阪三五一四番を利用されたい)

、右の件に關するお問ひ合はせは返信料封入のこと。

川柳人協會

理事長 藤生路郎

食ふところか
ち
店 湖 同
寺地法善寺境内

舞扇變人選

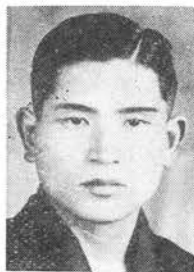
かつちりと言ひ當てられたほち袋
 柳太
 附け文の様に握らすほち袋
 尺琴
 ほち袋貫ふに慣れて帯に挟せ
 文庫
 もてなしががらりゝ變るほち袋
 菊路
 ほち袋帯にはさんだまゝ忘れ
 水客
 御最負の張りこんでゐるほち袋
 吞水
 ほち袋はんのすこしゝ渡される
 紫香
 無造作に女將に渡すほち袋
 天作
 伯母さんは去年の高のほち袋
 曉童
 距りをふみ感じるほち袋
 南渡路
 ほち袋貯金の風に吹かれてる
 葉留路
 ほち袋貫つた金は献金し
 寄興史
 ほち袋かへりの道のはやいこゝ
 香月
 嬉しさを隠して貰ふほち袋
 重三
 貰いて札だなと思ふほち袋
 春坊
 アート

人數に一枚足らぬほち袋
 ほち袋仲居はくれるなと思ひ
 蔭に呼びわけてゐるなりほち袋
 ほち袋帶の間に忘れられ
 ほち袋年に似合はぬ口をきき
 ほち袋子供に豫算あるのなり
 ほち袋貯金するこて取り上げる
 ほち袋二人で決めて置いておき
 ほち袋背中たたいて握ぎらせる
 ほち袋幹事に高を決められる
 嬌笑は帶へはさんだほち袋
 窮窟な紙幣が出て來たほち袋
 恩のある夫婦も貰ふほち袋
 ほち袋障子の外は梅が咲き
 握手した手へほち袋握らせる
 (佳)ほち袋いつも離さぬいい身分
 (佳)ほち袋呉れて得意な顔になり
 (佳)ほち袋野心も少しこめてあり
 (佳)ほち袋五十銭かき見くびられ
 (佳)台所の隅へもこぎくほち袋
 (秀)ほち袋呉れるこ仲居又代り
 (秀)御使に半紙ばかりのあつけなさ
 (軸)風呂敷の上からささはるほち袋

春巢 斗風 市他樓 美知夫 松太樓 双虎 華蝶 謙南坊 流葉 ライト 風葉 葉光 同 潮花 同 柳太 香月 齊タネ 春巢 葉光 菊路 無煙 柳秀

舞扇 變人選

舞扇 流葉
元談を本氣に叩く舞扇 薇花
舞扇 女將も踊る春の宵 斗風
口も手も足も扇の五葉の松 市他樓
舞扇 扇みぢんもすきのない姿 柳太
舞扇 腕には年を取らない氣 曉童
理解ある瞳を意識して舞扇 謙南坊
兩親が好きでならうた舞扇 ライト
母親の昔を語る舞扇 春坊
舞扇 だけを知つてゐるローマンス 春巢
母親が氣をもんでゐる舞扇 葉留路
はめるのへてれくさそうに舞扇 紫香
弟がはがいがつてゐる舞扇 南濃路
舞扇 嬉しく親の肩が凝り 水客
半生を冷たく生きた舞扇 吞水
おけいこのきびしさに立つ舞扇 葉光
舞扇 やがては金に見つもられ 曉童
(五) 引越してから棚にある舞扇 尺琴
(五) 少し手が違ふと思ふ舞扇 ライト
(五) 春を待つ心の動く舞扇 香月
(五) 明日おさる衣裳の上の舞扇 謙南坊
(五) 二次會にさせる氣でゐる舞扇 双虎
(人) 舞扇 師匠の氣質なつかしみ 風葉
(地) 舞扇 けいこやを出る寒い晩 潮花
(天) ものすごい人氣へたむ舞扇 双虎
舞扇 十八かいな七かいな 變人



しても相當に名をなしてゐる。令閨公子さんが女流作家の一人として作句に精進されてゐるの

も君の川柳熱のあらはれだと云へやう。君が川柳に手を染めたのは昭和四年の九月だと聞く。

寝ころべば草の匂ひに手のにはひ飛車押して押して大阪よいところライオンに似てゐるモガの姿なる

これが君の句風だ。第二句に於て現實闘争への若々しい君の姿を躍動させてゐる。

君の本名は義秋(よしあき)、明治三十九年和歌山に生まる。居を大阪府下柏原に構へ、大阪市電氣局鶴町運輸事務所に職を奉じてゐる。

川柳雜誌社不朽洞會員、川柳人協會評議員

(二四) 中西おさむ君

おさむ、中西脩(おさむ)君は大都映畫關西支社の會計部長だ。



眉目清秀の青年紳士、一見してこれが映畫會社でソロバンを弾いてゐる人とは思へない。

君は昭和六年の夏、「川柳雜誌」へ投句したのが川柳の門を潜つたはじめだそう。

矢が効く話白髪を染めてゐる低脳兒お釣銭を貰ひすぎてくる伊達巻へ女の細さ親しまれ

が、君の作風である。

川柳以外の趣味として、げてももの蒐集、漫談、寫眞、昔の小ばなしに興味を持つてゐる。君は明治四十一年十月九日、中京名古屋に生れた。目下は大阪市東成區北生野町に在住。

川柳雜誌社不朽洞會員、川柳人協會評議員

協・川

▼東北の重鎮、大谷五村君(川協名譽會員・川柳客員)が三月上旬關西遊覽の途上、松山を訪問されたので酒井大樓君が

川協理事として、又松山川柳支部を代表して松山驛頭に迎へられ、席をあらためて五健、靈子、蛇の鷹、大樓君等が五花村君を圍んで柳談に耽つたとのこと。

▼東奥の異才夢一文君が「岩木」誌上で「全国各地に散在する川柳人諸公が一堂に會して川柳研究大會を開催して川柳向上の一筋たらしむる」とが出来ないものだらうか。」と述べてゐられるが、出来ないことはない、爲すべく努力しないのである。

それが實現に向つて努力しつゝある人があつても、他人の努力を買ふ度量がなく、それなら自分でやるかと云へば、自分ではやらない、やれもしないといふのが今日の柳壇の現状であるから情けない話だ。現に川柳人協會は一昨年の七月以來、この事に幾度言及したか知れない。そして協會はそうしたことの實現を考慮してその基礎工事に向つて日々努力を續けてゐる。夢一文君にしても眞に川柳を愛し、君が説くが如き有意義な川柳研究大會を開くことの實現を切望されるなら、川柳人協會の理事者の一人となつて、力を藉して貰ひたいものである。協會は柳界の將來を三思し徐々的にでも先づ實行といふことに向つて努力しつゝあるのである。説としていかに、いゝことでもそれを實現せしめるには幾多の犠牲が要る。その犠牲を拂はずに結果の

いゝことばかりをのぞんだところでそれは空理空論に終つてしまふものだ。こんなことは夢一文君にはもとより釋迦に説法かも知れないが、夢一文君が、この事に氣づかれた以上は率先してこの難事業の理事者の一人として盡くされたいものだ。

▼高橋月南君の主宰する大連の「青泥」が滿洲から綜合柳誌發刊の目星がついたので廢刊する旨を發表してゐる。滿洲柳壇のためによろこぶ。

▼石川縣津幡町の松島みどり葉君が「三文路」を復活させ、その第三卷第一號を手にした。發展を祈る。

▼もつと川柳をホントに愛する人が出て来て我等と協力して欲しい。聲色を使つてゐる人たちは、いくら聲を張り上げて見ても聲色でしかないといふことに氣づかなければ嘘だと思ふ。

今の日本は非常時だが、黄金時代の來たことのない柳界はいつでも非常時のつもりで、みんながウンと働かなければ駄目だ。

川柳人協會の仕事も、いつまでも私の微力に俟たなければならぬやうではいかぬ。若い人が出て来て、ドシ／＼計劃し、ドシ斷行する、そのためには各地で協議會が開かれるといふ時代を早く現出しなければいけない。

▼日本柳壇百人選の人選に就いては本年度は協會の役員の撰薦によつて一層意義あるものにしたと思つてゐるので今から各役員は心がけて頂きたい、須く前年の既得権は尊重する事にしてゐるのでその點はお含みありたい。しかし幾ら既得権があつても、句作が休火山状態である場合には、已むなく男退を願ふことにな

つてゐるのでその點も留意されたい

▼川柳人協會員の倍加運動に各役員は云ふまでもなく、會員諸氏に於かれても特に盡力されたい。川柳會員の増加は必ずや大きな力となつてあらはれることを約束する。最近會員の勧誘に尤も多くの力を致された正會員丸尾潮花君にこの際御禮を申し上げる。各會員に於かれても丸尾君の例にならつてグ／＼會員募集に協力されたいものである。

▼川柳人會案内希望の方は左記へ御申込ありたい。早速郵送する。

大阪市西成區玉出本通三丁目三六 川柳人協會 振替大阪三五一四



のた
めに

妊娠としての大切な責任はカルシウムを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

梅林醫學博士 推獎
片瀬醫學博士 監査



ブダカルシウム錠

大阪道修町 和田助助商店



日向ぼこ慾をはなれた座りやう
子の慾は見たゞけみんな僕のもの
珍客へ話は思ひ出許りなり
思ひ出に日記へ赤い丸をつけ
思ひ出の日記心も若返る
餅のかび故郷捨てた夜を思ふなり
故國去る日思ひ出となれ霞む山
思ひ出を綴るベン先よくすべり
思ひ出を淋しく抱いたまゝ寝入り
紺緋昔の僕の色が褪せ
若き日の思ひ出語る此の寫眞
話ふと冷たい過古にふられる
默禱へふと思ひ出の次々と
すうとどの湯氣へ空腹そうな顔
眼鏡越しうとどの湯氣をふいて
盛り場を外れて夜泣きは荷を下し
寒行が通るうとん屋からの湯氣
もう一度吹いて夜泣きは辻を折れ
心得た顔で給仕はうとんにし
すうとんに七味の味がとてもきゝ

支配人の癖を給仕は心得る	心府	支配人言ふ事があり笑はない	曉童	横文字の方が達者な支配人	文庫	判おすも話の中の支配人	よしを	社長よりよい罷を持つ支配人	平尾	世は遷る舊家の跡の麥畑	文庫	麥畑畦も上手に使ひおり	よしを	凍る月麥はかすかに息をする	心府	麥畑を横切つて行く貰ひ風呂	同	麥畑次男を近衛兵に出し	曉童	麥畑今年は分家の家が建ち	平尾	麥畑やかんの走るお晝時	よしを	麥畑から案山子のやうに汽車を見	文庫	わずらつた事も話して内金す	同	内金の最後は遂に棒を引き	心府	内金はその御歳暮に恐れ入り	曉童	年末の内金少し餘計くれ	よしを	内金をしてどしどしと注文し	平尾	巻紙へすらくくく讀みにくし	心府	巻紙へ行をつめてる母の文	同	巻紙に候ばかり良く目立ち	文庫	巻紙で書いてきれいに斷られ	曉童	川	塗青支部句會 (大阪)	二月一日	於謙公居	淺謙公報	炬燵 晴着 箸 會費 無言 寒月	置こたつ義理も人情も捨てゝある	松太樓	外出のフト氣に掛るこたつなり	ライト	獨り寝へこたつゴトンと鈍い音	粒子	斷りをしようことなしに出るこち	よしを	初大師けふはこたつが空いてある	京詩	丸干にしとこたつからのこゑ	光路	手紙だけこたつにあつて誰も居ず	變人	趣味といふうれしい會費出と居る	よしを
--------------	----	---------------	----	--------------	----	-------------	-----	---------------	----	-------------	----	-------------	-----	---------------	----	---------------	---	-------------	----	--------------	----	-------------	-----	-----------------	----	---------------	---	--------------	----	---------------	----	-------------	-----	---------------	----	---------------	----	--------------	---	--------------	----	---------------	----	---	-------------	------	------	------	------------------	-----------------	-----	----------------	-----	----------------	----	-----------------	-----	-----------------	----	---------------	----	-----------------	----	-----------------	-----

[illegible]

逢ふ迄の晴着を風にまかしとき
手を醫し母が見送る晴着なり
奮闘の晴着故郷の土を踏み
十八九晴着を脱げば腹が減り
箸のよういつも二人で離れまい
喰べ初の子にも箸を持たせて見
そこら中ご飯だらけの握り箸
一粒へ勿體ないと箸の先
不機嫌な父はだまつて箸を取り
父を待つ箸へ子供は腹が空き
よい旦那舞子の箸が顔へ来る
借りられる見透し付いて箸を取る
割箸で其日くを生きてゆく
きつちりと箸を並べた歸り時
握り飯娘としての箸が要り
花嫁は嬉しく箸をもつただけ
いたづらといふ兒の箸の忙がしさ
箸とつてふと戦線の兒を思ひ
挨拶のすむ迄みんな箸をおき
奉公に來た兒淋しく箸を持ち
口上の屈かぬ隅は箸を取り
割箸を淋しく割つて旅に居る
新世帶箸と箸との先がふれ
女客まだ割箸へ手もつけず
割箸といふを忘れて居る若さ
骨上げの箸から箸へ諦めて
割箸を握る夜業の手を洗ひ
今鯛のさしみと云ふへ屈く箸
起てば忠座れば孝の箸を取り

川 雑
天王寺支部句會 (大阪)
妹尾變人報

出征 約束 ポーナス
召集令うけて男は見なほされ
征け生きて歸るな母の氣の強さ
九段坂それとは言はず赤澤
召集になつて息子をほめそやし
出征の留守を女の健氣なり
出征へ母と名残りの虫をきく

双虎 粒子 ライト 光路 一郎 清女 ライト 變人 巨 人 よしみ 双虎 同 よしみ 双虎 清女 ライト 清女 松太樓 京詩 謙公 京詩 謙公 變人 松太樓 巨 人 白峰 謙公 ライト 白峰 光路

勤 坊 施風子 句 盲 六 茶 兵 率 粒 子

今は亡き我が子を思ふ召集令
出征の兄と最後の夜を語る
出征の首途を祝ふ茶碗酒
日本の強さを見せる出征日
約東はニュースをきいて思ひ出し
約東の日に返されぬ金を借り
約東が叶ひ嬉しい新世帯
約東の娘が待つてゐる卒業日
再會を約して友は満洲へ
もう五分男心を待つて見る
約東の京人形を土産にし
約東の眞面目な人が待たされる
病床に慰めにくる約東日
約東を思ひ出させる温泉のけむり
ポーナスで戦地の兄に何送る
ポーナスの噂が出ると課長にげ
子供等に約東はたすポーナス日
買物はしたかポーナスあてちがひ
年の瀬はポーナス一つで支配され
さびしさを見せよ笑ふポーナス日
ポーナス日まつすぐかへる年に
ポーナスは銃後の妻に渡される
ポーナス日いつものちがら壇か
ポーナスで道具のふえる新世帯
ポーナスの袋にプラン書などし
ポーナスをみんな渡して差向ひ

岳 峯 巨 人 富 士 双 葉 美 好 悟 樓 濱 木 綿 南 蠻 人 風 來 坊 純 子 松 太 樓 巨 人 濱 木 綿 孝 夫 丁 子 六 茶 新 世 界 竹 子 勤 坊 悟 樓 兵 率 勘 坊 富 士 粒 子 巨 人

雑 川 大鐵支部句會 (大阪)

十二月九日 於大鐵局クラブ四號室 正本水客報

あゝ世帯炬燵で足袋が乾かされ
足喧嘩してゐる炬燵へ密柑が来
糸繰りを頼む炬燵へ本をふせ
ぬくもらぬ炬燵へ足を持てあまし
熱燵のほてりそのまゝ炬燵の火
兄妹の趣味が合はない置炬燵
エキホスが泣く子の脊に引つか
瀑布の子と母留守番してゐるなり

某 人 紫 香 同 柳 太 知 開 秀 太 喜 山 水 客

冷濕布子供は逃げる仕度なり
伊達濕布巻いてゐる妓のうら若さ
濕布する妓佗しく灯へ座り
のど濕布する娘は一人パンをとり
妹の方も仲人見て歸り
それ位の事は仲人笑つて居
仲人へお茶汲んでくる薄化粧
仲人は酔へない酒を一つ受け
仲人へ頼りきつてゐる綿帽子
仲人へ折柄街は曇て来
生花の流儀仲人尋ねとき
仲人の顔のぞきこむ母の顔
標札へ近眼鏡を近かつける
門内に砂利標札は苗字だけ
柿の木の下で標札くすんでる
秋刀魚焼く匂い標札くすんでる
巡業の芝居へ村は景氣づき
ハネ太鼓知つた壽司屋へ足が向き
つき合で見る前賣の列にゐる
見えすいた芝居を言はず貸して
顔見世へ男の影の薄いこと
ややくその競馬があつた年の暮れ
子の涙を叱るばかりの年の暮
大晦日餅のまはりの子を叱り
物干で雪がとけない植木鉢
物干で涼む母子へ流れ星
物干へやつと逃れた夏の夜
物干がちと氣に入らぬいゝ借家
物干に暮しの色が讀へり
物干で隣のけむりかゞされる
物干の上で此の家借るときめ
物干を狭く植木の位置を替へ
夜干しする足袋物干も師走なり

稔 幸 萬 的 柳 太 香 山 喜 客 水 秀 一 生 紫 香 某 人

雑 川 岡町支部句會 (大阪)

二月十一日 於 築港高野山 丸尾潮花報

ランテ、柳友、中ノ島、人絹、名刺、豆炭
泥、雑
上京の父へランテを取つてあげ 美鳥

姉妹みんなランテの椅子へかけ
ランテまで非常時色の値とかはり
海老一つ残してランテしまはれる
デパートのランテも豫算の中へ入
ランテで飲む一合は旅のもの
危げな手付きランテへ運ばれる
親子連れ父はランテで酔ふてゐる
ランテからランテへ窓の陽がうつ
粉な雪へ句にする友が訪れる
柳友としての社長へ氣兼ねせず
戦場の便り餘白を句でうづめ
柳友を訪へば大きな家に居る
柳友の氣持へ一人うなづける
のんびりとした様になる中の島
中の島アベックく舟うかび
戦捷は中の島から旗の波
中の島今日は女給が體操し
中の島明日の希望へ夕焼ける
履歷書を握りつぶした中の島
横つちよへボールがころぶ中の島
ボン／＼船窓を見て行く中の島
中の島赤と黒との影が見え
中の島蟹と居る日を淋しがり
中の島暮れて河面に灯がうつり
春らしいパラソルの色中の島
人絹でない商人もんで見せ
人絹の風呂敷きちんと包まれず
人絹のわかる子供を吃り付け
人絹を圍んで女給まとまらず
人絹の同じ柄を着てゐるなり
名刺持つ手がはじかんだ朝の霜
町内にこんなのも居る貴名受
暗い街名刺を持つて立つてゐる
花名刺袂に残して氣にかゝり
名刺とは似付かぬ顔の男なり
名刺など貰つて嬉し就職日
つましく住んで表札名刺なり
父の名刺で通される廊下の灯

美津枝 美濃留 松太樓 水客 吞水 霞乃 潮花 紫波 一幸 幸葉 水客 同 草香 紫美 楠美

阪大川柳句會 (大阪)

丸島利生報

花名刺強い男になり切れず
豆炭は眞夏きれひに並んでる
手鍋の下で豆炭眞赤なり
豆炭をつゝいて女金のこと
豆炭へ思ひ切る手が美しい
豆炭をいじる勝氣な目の動き
豆炭をくずす男と氣があはず
腕時計波が乾いてねじをかけ
植木屋の泥でよこれたまゝかへり
拾ふ氣のエンタツ泥をかけて去り
靴の泥くはへ煙草のまゝおとし
長靴で子供は泥をけつて行き
泥の中立止つてゐる姉の顔
看板へ泥がかかつたまゝ乾き
マスクして咳をしながらく
午前二時看病の眼も眠くなり
煙突が見えてる丈けの部屋に寝る
日章旗こゝも平和にかへる街
すき焼に姉に笑はれ帯ゆるめ
氣ぜはしく来れば信號赤となり
病上り松の緑が眼にしみる
空のピク村は冷たい雪もよひ
双葉山千秋樂も土つかず
蜜柑狩り抱き上げられて一つとり
釣草の隣りきれいな手が下り
言ひ切れぬ嘘へ先輩笑ろただけ

元日、炬燵、雑吟、病氣見舞
元日は隣のドア一靜かななり
二見まで出掛けて初日拜まれず
元日に蔭膳据えて勝ち戦
元日の日記抱負が大きく過ぎ
元日にもう厄年の話が出
温泉で年始の禮を缺くもよし
妻や子の御慶を受ける父の膝
元旦や押すな押すなで初詣り
散髪の顔が揃ふた拜賀式

柳秀 正甫 柳秀 芳一 同 方正 春巢 利生 柳秀 柳秀 柳秀

ホエ鴉はかどはかされるやうに、行き
ハンドバック迷へる心パチつゝ、
バス嬢の嘘空いたのがすぐさま
花束を持った見舞のよい娘
お見舞に行けば二號と飲んでゐる
見舞客どの人もどの人も元氣をう
素人が口養生を説いて行き
見舞客病人さんに笑はされ
病室でうどん頂く見舞客
退院へ見舞の客と寫眞撮る
重症へ頭を下げたのみで出る
御見舞へ附添言葉添へるなり
病人の向ふむいたをとがめまじ
女將を先に藝者の見舞派手にくる
口の悪い病人見舞テレてゐる
上役の見舞病人かたくなり
もう大丈夫を見舞聞かされる
ソコ／＼に見舞を云ふて課長去に
お見舞の籠を子供はねらつてゐ
見舞品とと婢とが折れ合はず
退院は見舞の花をさげて出る
お見舞に晝帳置いてるいゝ生活
お見舞の小鳥嬉しい聲を出し
まじないも教へて歸る見舞なり
お見舞は素人の顔でやつてくる
お見舞は愚痴をへい／＼聞いて
お見舞が來て花の位置變へて去に
お見舞が又おどかしてかへるなり
お見舞へ今日は靴のない先生
見舞客雪のチラツク話もし
お見舞に行きカールのウエーヴの
見舞客細いかひなを見せられる
氣に染まぬ見舞へ患者目をつむり
お見舞は出口をきいて歸るなり
一寸も知りまへん女將見舞に來
もう六度三分が續くの見舞ひ
忙しさのふ退院したと聞く
富田屋の妓もきて見舞あふれて居

カンニングの上手が今は専務なり
カンニング勉強以上の頭ある
カンニング自然に頭が重くなり
カンニング先生も昔覚ええあり
今は時め役人もカンニングの専門家
世の中は昔も今もカンニング
出世してカンニング氏もほめられ
カンニングうっかり次の行を書き
スカートの膝にも一手カンニング
級長はカンニングには同意せず
上級生カンニングの仕方まで教へ
カンニング趣味とも言へる工夫あり
嘲つた奴がひそかにカンニング
カンニングのあの心臓で今も行く
カンニングまでして出たに世を早め

ソファア

ソファアから先づ位置を見寫眞也
ソファアから小鳥見つめる小半時
里の母ソファアの中にちとまり
ソファアの後ろへ廻るねだりやう
宿直の役得ソファアにそり返り
先代の社長のソファア残し置き
結局は此家にソファア大き過ぎ
おれもやつとソファアを買ふ身分
ソファアに座し明日の拂が氣ふ
御威勢ぶりソファアの紫煙うか
ソファアで新聞を読むい身分
春の夜のソファアの君へ電話鳴る

山田南濃路報

増築の方が大きいビルディング
増築はせり合ふやうに高く建ち
御本家はねたみの中に御増築
増築の眞最中を出征す
増築へ金庫の位置も變るなり
増築の家繁昌の槌の音
増築のプランに他所の松の枝
増築をやつたは女手一つなり
増築は出来たけれども二部教授
増築の母家へ梅が咲いてます
増築へ長屋は蔭になるばかり
初雪に増築の灯が包まれる
熨斗つけてまだ跳ねてゐる明石鯛
熨斗つけて行く挨拶のむつかしさ
大會社熨斗も重みを見せてゐる
熨斗つけて鮭はるばると送られる
戦捷の景氣の中の慰斗の巾
熨斗ためて／＼父親死んでゆき
もう一度あらためられて熨斗が
親友だ熨斗も飾りも要るものか
熨斗つけてやると憎くまれ口過
運命のかはる熨斗とは知らずして
贈賄の品とは見せぬ熨斗がつき
聞き分けの無い子に熨斗つかまれ
階級の違ひ靴にも見せてゐる
子の靴に母の袂がよくされる
靴はけば子はあきらめておじ儀
地下足袋の父と娘のハイヒール
野心ある靴は舗道の灯にひかり
嬉しさを靴一ぱいに磨き上げ
靴買つて次は時計がほしい年
魚屋の靴は電車に嫌がられ
歩けない子の靴士がついてます
片方の靴が知れない夕まぐれ
同じ靴同じ足音家内無事
遠足があつて子の靴みがかされ
靴脱げば襪と變る長女なり

文月 ただし 峰月 川舟 靜波 秀峰 南濃路 辛雅 繁雄 斗風 美知夫 鮎美 靜波 美知夫 辛雅 斗風 峰月 鮎美 力夫 寄與史 辛雅 南の路 美知夫 辛雅 文月 美知夫 秀峰 哲郎 斗風 力夫 辛雅 美知夫 南濃路 鮎美 力夫 寄與史 麻斗

投稿規定

▲投句は本社發賣の
投句用箋、官製華
書又は同型の厚紙
に各種各題必ず別
紙に認め、住所氏
名雅號を明記する
事。

募
集

第十五卷 第五號課題

三月卅一日締切

(十句以內)

禁

煙

父

第十五卷 第六號課題

四月廿五日締切

(十句以內)

演 雨

說

每
號
募
集

近作柳樽
（雜句吟）

麻生

▲投稿其他につき御
問合せはすべて返
信料封入の事。

(順はろい) 々人の係關社

藤村	國枝	長野	長崎	田嶋	嘉納	笠原	片岡	大岡	長谷	池澤	贊助員	主幹
史晴	半柳	牛柳	路直	弘一	樂居	徹郎	生方	平雄	雄居	郎		
作郎	濱郎	秀二	純生	方平	雄居	郎						

川村花菱	川上三太郎	龜井晟修	小西長三郎	大谷五花村	大島濤明	沖野岩三郎	伊山一歩	島藤彦造	各員	末弘巖太郎	淺田清司	赤井清一	藤本卯之助
------	-------	------	-------	-------	------	-------	------	------	----	-------	------	------	-------

森 小林 藤里 蛙子 篠原 柴谷 食満 前田 安川 窪田 高尾 生方 田村 米村
東 不 好 春 宰 南 雀 留 波 敏 素 孝 あ
魚 溟 古 雨 二 郎 健 郎 美 樓 雄 文 之 介 ん

妹吉市村姬朝水北岩 山永西福高橋不朽
 尾田場松田田谷山崎★本里田山雨橋本洞
 變水食夢夕新鮎悟柳 丹 九 艸 雨 綠 會
 人車子鐺鏢水美郎路 路 樂 樓 雨

大丸黒正鳥加近江原中石宮後西松春須大
坂尾川本藤藤西曾岡藤下元崎西
形潮紫水古イつ史さ民白青わ柳紀豆八
水花香客弗ト勇る風む郎峰兒を子太秋歩

支 部 と 幹 事

道頓堀支部(大坂市)	庄萬よし	大鐵局支部(大坂市)	正本水客
九三會支部(大坂市)	北山悟郎	西條支部(愛媛縣)	荒井英賀夫
函館支部(函館市)	龜井景修	光耀會(大坂市)	竹内機見女
高知支部(高知市)	國澤春水	今里支部(大坂市)	市場没食子
梅田支部(大坂市)	水谷鮎美	今治支部(今治市)	渡邊曉童
田邊支部(和歌山)	辻左馬	光笑會(大坂市)	永田里十九
箴川支部(島根縣)	尼綠之助	伯耆支部(鳥取縣)	三鴨美笑
鳥取支部(鳥取市)	中島鐵州	竹原支部(廣島縣)	松井可笑
松山支部(松山市)	酒井大棲	十三支部(大坂市)	淺野牧人
御旅支部(大坂市)	江戸みつる	臺中支部(臺灣)	宮内耕朗
天王寺支部(大坂市)	妹尾變人	兵庫支部(神戸市)	三崎陽幸
鶴町支部(大坂市)	宮岡白峰	廣島支部(廣島市)	福岡葉留路
御池橋支部(大坂市)	西いわを	名古屋支部(名古屋市)	吉田水車
松江支部(松江市)	勝谷山川兒	岡町支部(豐中市)	丸尾潮花

☆☆☆☆☆
後記
☆☆☆☆☆

▼銃後の春も櫻は綻びて、うららかに變りな重壓を感じる。
▼今の私は銃後の文化運動について舊進し續けてゐる。
▼本誌も改裝飛躍號以來、好評に次ぐに好評で、前號の如きは約四割八分の増刷をした。
▼從つて發送は三日にわたつて多忙を極めた。發送の最終日の夜には夢裡、いわゆる兩君が來室援助されて片附いた位だ。
▼私のガンバリズムも段々徹底してゆく。毎日終電に近い時間まで平日の事務室で筆を執つてゐる。朝日ビルにある東魚君が「オイ招り切れるなよ」と時々覗きに來て呉れるが、まだ／＼招り切れそうにもない。しかし友なればこそだ。
▼本誌の五月號を十五周年記念特輯號として刊行することにしたので格別の御支援を切望する。
▼これを機會に、川柳雜誌社の舊同人で現柳界から遠ざかつてゐられる諸君の動靜なども知りたいと思つてゐる。

了た林敏郎の追慕川柳會に臨席された。追慕川柳の一文を寄せられた。須崎豆秋君は「川柳眞如」を寄せられた。
 ▼科學と藝術は對蹠的に考へられてゐるが私はこの二つのものものゝを並行した二線だと思つてゐるので、本社の三月月會を廿三日午後五時半から四ツ橋の市立科學館の五階で開催することにした。開會に先立つてブラネタリウムの魅力に陶醉し、次いで京大の花山天文臺で研究された同館天文部の高城武夫氏から興味本位の講演を拜聴することにまつてゐる。私も天體に關する句を蒐めて何か談す積りだ。斯うしたいや機会に天體に關する句をウソと作つて見るのも面白いと思ふ。
 ▼柳友で、ポーズの面白い寫眞を撮らたら御惠送を願ひたい誌面を賑やかにするために心懸けて欲しい。
 ▼發行日を漸次早めるから載り遅れぬやう原稿の締切日を嚴守された。
 ▼次號から「川柳移動座談會」を發表することにした。期待されたい。
 (路郎生)

價 定

一 部 金三十錢
半箇年前金(特轉號共)壹圓八拾錢
一箇年前金(特轉號共)三圓六十錢

廣告料

本誌への廣告に就いては事務所へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

載轉斷無禁

第三卷 第三號
（每月一回十五日發行）
大正三年三月一日印刷
大正三年三月十五日發行

編輯兼發行人 印刷人
大阪市西成區玉出本通三丁目三十六番地
麻生幸二郎

發行所
大阪市西成區玉出本通三丁目三十六番地

川柳雜誌社

電話天下茶屋二五七九番
振替大阪七五〇又〇番
昭和ビル第一號室
電話土佐堀三三三・八六三・八一六四

事務所
大阪市西區江戶堀（筑前橋電停前）

支社
東京市蒲田町女塚町二丁目二二ノ一
川柳雜誌社東京支社

店書捌賣

石塚（京都）三宅（名古屋）静觀堂
玉森堂 紀伊國屋 三味堂（神戸）米田實文館（函館）
其他市內各書店（東京）かん東京堂 かん巖松堂 やつ古岡書店
（大阪）大賣捌大寶書店 參文社 明文堂 朝日ビル書店

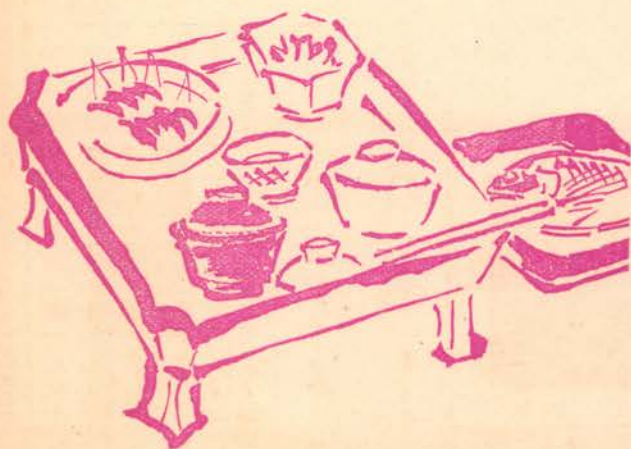


断然日本一

マルキン醤油

良いお醤油は

結局経済です



船の旅

温泉へ

別府線
勝浦線で

大 阪 商 船

— 案内書進呈 —

大 阪 午後五時發
神 戸 同六時四〇發
和歌浦 同九時四〇發
(一日で那智、下
遊覽 翌早朝歸着)

清 酒

白 鶴

にきびとに

美^び顏^が水^す



美容藥としても

ニキビ吹出物に非常によく効きますので
大評判の藥です。ぜひお勵めしたい藥!

この藥は美容藥としても大へんよく入浴後や洗面後等にお用ひになるとても爽快で、ニキビ吹出物を防ぐのは勿論、キメが細かにツヤを増しお顔がスツキリと美しくなるので美容藥としても盛んに愛用せられてゐます。

蚤蚊南京虫其の他毒虫でカユイ時にもとても便利な藥!

ニギビ

此 ^{この}	に	吹 ^{ふき}
藥 ^{くすり}	ぜ	出 ^で
を	ヒ	物 ^{もの}

水^{みづ}顏^が美^び化粧^{けしょう}用^{よう}

最 ^{さい}	粧 ^{けしょう}	の	ア ^ア
適 ^{てき}	下 ^か	お	ブ ^ブ
!	に	化 ^け	顏 ^{がん}